

令和6年度 江戸川区立臨海小学校 学校関係者評価報告書（学校経営計画・学校関係者評価シート）

学校教育目標	◎ 思いやりのある子 ○ よく考える子 ○ しょうぶな子	目指す学校像 目指す生徒像 目指す教師像	今日が楽しく明日が待ち遠しい学校 思いやりのある子 よく考える子 しょうぶな子 人間性豊かで、優れた授業力があり子供から尊敬される教師
前年度までの本校の現状	成果 ○互いを認め合う児童の育成に向け、授業や行事を通して素地づくりができた。 ○特別支援コーディネーターを中心に個に応じた指導の充実が図れた。 ○電子媒体を活用して保護者との情報共有を密にすることができた。 ○効率的に業務を進め指導の充実に時間を活用できるよう組織改革を行うことができた。	課題 ○個を大切にした指導を継続することで、児童同士も互いを尊重できるようにすることで、思いやりのある児童の育成を目指す。 ○学力・体力の向上を進めていくため、分掌組織を活用した組織的な対応と研究・研修・OJTをうまく活用した指導力向上が必要である。 ○地域との協力を強めるため、情報発信の仕方を工夫する必要がある。	

重点	取組項目	具体的な取組内容	数値目標	達成度		「中間」自己（学校）評価（A～D）		「中間」学校関係者評価（A～D）		「年度末」自己（学校）評価（A～D）		「年度末」学校関係者評価（A～D）		次年度に向けた改善案
				9月	2月	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	
学力の向上	○学力調査の活用	○全国・区の学力調査を活用し、指導方法の工夫改善を図る。	区の学力調査において、正答率1学期比10％向上をめざす。	D	C	C	4月と7月の結果では、4年生で1割弱減、5年生でほぼ横ばいであった。苦手領域の振り返りを行っている。	C		C	区の学力調査での正答率は10％向上とはならなかった。今後組織的に改善策を考えていく必要がある。	C	学力向上に向けてさらに取り組んでほしい。	学力向上委員会を中心にして、目標達成に向けて、より具体的で継続的な方法を考えていく。
		○学校と民間企業による放課後補習教室の実施	2～6年について、年間で各18名ずつ参加させ、基礎学力の向上を目指す。	B	B	B	予定通り実施している。参加児童及び未参加児童の状況により、対象者の入れ替えを実施していく。	B		B	予定通り実施することができた。参加者の状況も確認しながら声をかけ、効果的に実施することができた。	B		次年度は「EDOスク」となるので、より児童の状況に合った学習となるよう、担当が業者と連携し、担任も様子を把握していく。
	○読書科の更なる充実	○学校図書館の活用が活発になるよう、図書館司書及び図書ボランティアとの連携を強める。	月1回、図書館司書と図書ボランティアの情報を司書教諭を通して共有する。	A	A	A	図書館司書がとても細やかに対応してくださっている。今後の蔵書管理電子化に向け、分担や流れの打ち合わせを進めている。	B	広く素敵な図書館なのでどんどん活用してほしい。	A	図書館司書やボランティアと連携して環境整備や読書に向けた取り組みをすることができた。	B	今後も読書活動をさらにすすめてほしい。	次年度は蔵書管理が電子化されるので、環境を整え、より使いやすい図書室を目指し、児童が本に楽しく触れられるようにする。
体力の向上	○個の実態に応じた運動意欲や基礎体力の向上	○新体力テストを活用して個の実態把握を行い、体育の授業内容に反映する。	新体力テスト実施後、児童一人一人の体力の現状及び学級の実態を把握し、授業改善を行う。	B	B	B	体育の年間計画の関係で、体力テスト実施後の対応までに時間が空く学年があった。年間計画も踏まえて検討していく。	B		B	体力テストの項目を意識して授業づくりを行った。	B		本校児童の課題を明確にし、体育の授業を中心に、体力向上を目指す。
		○年間通して行なわ跳びウィークやマラソン週間などの体育的行事を通して、運動の日常化・習慣化を目指す。	各体育的行事において、児童の運動意欲を高められるよう学習カードなどを工夫する。	B	A	B	縄跳びについては、教育指導課提案のカードをもとに学校の実態に合わせて作成した。児童の意欲向上に役立っている。	B		A	縄跳びは出前授業を行い、児童の意欲を高めて、なわとびウィークにつなげることができた。他の体力づくりについてもカードを活用して、意欲を高めることができた。	A	縄跳びに一生懸命取り組む様子が見られた。	縄跳びウィークやマラソン週間を継続し、児童の意欲を向上させていく。
			各学習カードについて、児童の目標達成率90％以上を目指す。		B		9月時点ではまだ成果の確認が取れない。			B	目標達成率は85％となった。目標には届かなかったが、児童の学習に効果はあったと感じる。	B		体育部を中心にして、より効果的なカードを作成し、学校全体で共有していく。
実現に向けた教育の推進	○個に応じた指導の充実	○校内特別支援部を中心に教員及び児童に向けた理解推進教育を進める。	毎月の校内特別支援部の中で具体的事例をもとにこの特性に応じた指導方法の開発・共有を図る。	A	A	A	コーディネーターを中心に、巡回指導教員・SC・SSW・巡回心理士等と情報共有を密にすることができている。	B	もっと発信があると良い。	A	コーディネーターを中心に、巡回指導教員・SC・SSW・巡回心理士等と情報共有を密にすることができた。	B	取組についてもっと発信してほしい。	今後もコーディネーターを中心に、巡回指導教員・SC・SSW・巡回心理士等と情報共有を密にしていく。
		○エンカレッジの活用	4月中旬にエンカレッジ対応のシフトを作成し、学級担任が依頼しやすい環境を整備する。	A	A	A	担当者が意識してくれているので、いざというときに担任が頼みやすくなっている。	B	もっと発信があると良い。	A	シフトを整え、いつでも対応できるようにしたことで、担任が依頼しやすくなった。	B	エンカレッジルームを効果的に利用してほしい。	エンカレッジルームは継続し、エンカレッジサポーターの活用も加えて、より子に応じた指導を展開していく。
		○交流および共同学習の充実	特別支援学校との副籍交流やかもめ学級と通常の学級の交流および共同学習を行い、月1回程度交流の様子を発信する。	C	B	C	交流の様子を伝えることができていない。	B	もっと発信があると良い。	B	かもめ学級と通常学級の共同学習を行うことができたが、回数としては月1回は達成できなかった。	B	具体的にどのようなことをしているのか知らせてほしい。	年間の指導計画に、共同学習や交流学习を組み込み、計画的に行っていく。
不登校・いじめ対応の充実	○思いやりのある子の育成	○学校・学年・学級それぞれで役割分担し、日常の様々な場面で思いやりのある子の育成を目指す。	毎週の校長講話を活用し、子供同士が「違い」を尊重し、安心して過ごせる学校を目指す。	B	A	A	子供たちが意識しやすい出来事があったときには、それを題材に自分事としてとらえやすくなるよう工夫して指導している。	B		A	校長講話では、思いやりについて触れる機会を多くし、児童も意識することができた。	B		校長講話や道徳の授業を活用して、相手を思いやる気持ちを醸成していく。
	HyperQ-Uの活用	○HyperQ-Uを活用した児童の実態把握及び学級・学年運営への活用推進	1学期中に実施したQ-Uテストの結果を夏休み中に分析し、学年会において2学期以降の学級・学年経営について検討する。	B	B	B	生活指導部において共有し、今後の指導に活用できるよう検討している。	B		B	分析したことを担任が活用したが、組織として、より活用の仕方を検討する必要があった。	B	どのようなことをしているのか発信してほしい。	次年度はL-GATEを活用し、児童ひとりひとりの状況に目を配り、子供に応じた指導や支援を行っていく。
	SSWの活用	○区教委より示されたSSWの役割に基づき、SCとの連携を図ったより有効な運用を行う。	4月中旬にSSWの校内での役割について配置されたSSWと確認し、要対応児童について情報共有を行う。	A	A	A	SSWがSCの勤務日に来校するよう調整し、定期的に情報共有した上で連携をとった対応をしてくれている。	B		A	SSWがSCの勤務日に来校するよう調整し、定期的に情報共有した上で連携をとった対応をすることができた。	B	今後もSCを効果的に活用してほしい。	今年度と同様にSSWがSCの勤務日に来校するよう調整し、定期的に情報共有した上で連携をとった対応をしていく。
地域学校社会に実現された	○学校ホームページ及び保護者連絡ツールの活用	○学校ホームページの充実を図り、地域・家庭との情報共有を密にすることで教育効果の向上を図る。	すべての学年について週に1度は学習の様子を発信する。	A	A	A	日常の学習の様子などもホームページで発信できている。	A		A	行事や学習の様子を頻繁に更新し、地域や家庭に発信することができた。	A	内容が充実しているので良い。	情報部を中心に、ホームページの内容をより充実させていく。
		○保護者連絡ツールにおいて、写真などを有効に活用して児童の活動の様子を伝える。	学級だよりや毎月の学年だよりに、学習の様子がより伝わるよう児童の表情がわかる写真を入れる。	A	A	A	テトルでの学年・学級だよりで写真を多く使うようにし、より具体的な活動の様子を知らせることができている。	A	テトルでの共有がありがたい。	A	テトルでの学年・学級だよりで写真を多く使うようにし、より具体的な活動の様子を知らせることができた。	A	テトルでの配信がとても便利でよい。写真が多くて見やすい。	テトルを活用し、保護者や地域に向けて学校の様子を定期的に発信していく。
	○学校関係者評価の充実	○児童・保護者・地域へのアンケート調査を実施し、結果をふまえた成果と課題を発信する。	12月までに児童・保護者・地域それぞれに対してアンケートを行い、分析する。		B		9月時点ではまだ未実施である。12月の学校評価アンケートに向け準備を進めている。			B	アンケートの結果から次年度の教育活動の取組を検討した。	B	アンケートの結果を今後に生かしてほしい。	学校評議員会や保護者と連携し、意見を取り入れながら活動していく。
特色ある教育の展開	○指導力の向上	○若手主体の研修・OJTにより教員個々の実態に応じた指導力向上を図る。	年7回以上の若手研・情報研を実施する。	A	A	A	1・2学期ですでに目標回数の実施ができた。若手教員が自主的・意欲的に授業研を行っている。	B	先生たちの学びの様子も発信してくると良い。	A	若手研が充実したことで、教員の意識が向上した。また、情報研を実施し、タブレットやその他の情報機器の取り扱い方について全体で学ぶことができた。	B	今後も若手の先生が増えるだろうから、研修を確実に行ってほしい。	若手研の取組について、さらに検討し、主任教諭からの指導を充実させていく。
	○効率的な学校運営	○学校運営組織の改善を図る。	2か月に1回程度、組織運営の様子について企画委員会で確認し、改善策の検討を行う。	B	B	B	教務と管理職での共有にとどまることがあり、企画でより多くの意見を取り入れることができると良い。			B	企画委員会で、管理職の考えを伝え、意見を取り入れた。組織の核となる教員の意識が向上した。	B		企画委員会で教員の意見を集め、学校経営に生かしていく。
	○教職員のワークライフバランスの充実	○一斉退勤日を活用し、教職員の業務マネジメント意識の向上とフライバートタイムの充実を図る。	月1回の一斉退勤日を見通した校務遂行の奨励し、時間外勤務35時間以上の教職員0を目指す。	B	B	B	6月までは7名前後35時間以上の時間外勤務が見られたが、7月以降3名まで減らすことができている。			B	時間外勤務35時間以上の教員は3名となった。全体としては退勤時間についての意識が高くなっている。	B	働き方について、先生方もうまく調整できるといい。	今後も退勤時間を意識して、見直しをもって勤務する雰囲気을大事にし、互いに助けあうことを目指していく。